動詞に含意されない結果表現の成立と概念構造

Japanese Non-lexicalized Resultative Expressions and
Conceptual Structure

難波　えみ

Emi NAMBA

岡山大学全学教育・学生支援機構
教育研究紀要
第５号　2020 年 12 月

岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要第5号（2020）86 － 104

動詞に含意されない結果表現の成立と概念構造

難波　えみ*

Japanese Non-lexicalized Resultative Expressions and Conceptual Structure

Emi NAMBA

要旨　本研究では，動詞に含意されない表現であっても，結果を表す表現（結果表現）として解釈できるものを対象に，結果表現の成立および意味構造を考察した。「花瓶を粉々に割った」のような動詞に含意される結果表現と比べ，動詞に含意されない結果表現は，非生産的で，動作主の目的達成や意図のもとに生じた客観的な状態である。また，状態変化動詞だけでなく，位置変化動詞，作成動詞，料理に関する活動動詞にも結果表現が認められた。続いて,このような記述的な観察をもとに，動詞に含意されない結果表現がどのように意味構造で生起が保証されるのか，概念構造における規定を試みた。動詞に含意されない結果表現は産出面，意味的側面，構造面で高い非典型が認められた。
キーワード：結果表現　動詞　結果の含意　概念構造　非典型

１．動詞に含意されていない結果表現

日本語の一般的な結果構文では，「花瓶を粉々に壊す」「布を青く染める」のように，同一文中に，状態変化動詞と結果状態を表す結果表現（結果句）が現れる。日本語では，一般的に，結果構文中で現れる結果句は，動詞に含意されており，働きかけの結果，対象へ生じた状態を表す（影山 1996，小野 2007，三原 2000）。このようなタイプの結果構文は，他言語にも広く認められ，典型的な結果構文といえるが，日本語では，動詞に含意されていない句でも結果的な表現として見なせることも指摘されている（井本 2016, 井本 2001, 三原 2000, 宮腰 2007）。

（1）　a．太郎が皿を粉々に割った。
　　　b．花子が壁を赤く塗った。
　　　c．学生が床をピカピカに磨いた。
（2）　a．ケーキを大きく切る。（井本 2016:18）
　　　b．器にネギを平らに並べます。（影山 1996:236）
　　　c．シャツに名札をさかさまに付けた。（井本 2001:180）

* 岡山大学グローバル人材育成院　namba-emi@okayama-u.ac.jp

d．　彼はバターを厚く／薄く塗った。（Washio1997: 18）

（1）は，典型的な結果構文といえ，結果表現（「粉々に」「赤く」「ピカピカに」）は，動詞に本来的に含意されている結果状態が具現したものである。一方で，（2）の下線部は，動詞に含意されていないが，対象の結果状態を表していると考えられる。（2）の例は，結果表現が動詞に含意されていない点が特徴で、この点は（1）とは異なる。（2）のような文は，派生的結果構文（影山 2001, 2009），論理的結果構文（轟 2004），疑似結果構文（Washio1997）と呼ばれる。（1）の結果構文と比べ，（2）は明らかに性質が異なっている。

２．本研究の対象と目的

（2）に類する構文では，動詞が状態変化動詞でなくても，結果状態を表す表現が認められる。（2）に示したものに加え，（3）に挙げる状態変化動詞でない動詞（活動動詞，作成動詞）と用いられる副詞的表現も結果状態を表す表現とみなすことができる。

（3）　a．　ロンコーニはちみつなどで甘く煮たさつまいも、ごぼう、栗、黒豆などをタルトに盛りつけ、秋を表現。（実著者不明『ベーカリーパティスリーブック』）

b.　あまり派手に描きすぎると、少女マンガのようになってしまいますので、控えめにとどめておくのがコツです。（村上俊一『いますぐ使える Photoshop Elements for Windows』）

c.　正式な茶席では、円座（竹などで丸く編んだ敷物）や煙草盆が置かれている（青木直美『現代』）

（2）（3）で用いられている副詞的表現は，本来的に動詞に含意されている結果表現ではない。そうではあるが，文の意味を考えると，動作の結果生じた状態であると理解できる。一方で，「（歌を）甘く歌う」「（卒業を）派手に祝う」といったように，結果表現とは考えづらい場合もある。前節の終わりに述べたように，動詞に含意されない結果表現を含む文は，研究者によって異なる名称で呼ばれているが，典型的な結果構文と比べた際に，どのように位置づけられるのかは明確ではない。そこで，本研究では，結果表現が成立する際の，共起する名詞や動詞との関係や結果表現解釈が可能となる条件を検討し，（1）のような典型的な結果表現との関係を示すことを試みる。加えて，動詞に含意されないにもかかわらず，結果表現として成立するのであれば，それに応じた意味構造も規定できると考えられる。以上より，本研究では，（2）や（3）の副詞的表現が結果表現として解釈される仕組みを検討し，概念構造上でも結果表現として位置づけられる構造を提示することを目的とする[1]。

３．結果状態を表す副詞的表現の 3 つの特徴

3.1　非生産性

本研究で対象とする結果表現は，動詞自体に含意されていない。そのため，動詞の意味から想起されるものではない。例えば，「壁を赤く塗る」では，「塗る」は対象が何らかの色に

変化することを本来的に含意するため，「赤く」は変化した色を具現したものと言える。一方で，「マニキュアをつやつやに塗る」で，「つやつやに」は「塗る」に本来的に含意されているとは考えづらい。

では，このような動詞に含意されていない結果状態は，実際のところ，どのような使用実態があるのだろうか。ケーススタディとして，代表的な状態変化動詞である「切る」「塗る」を対象に，これらの動詞と共起する悔過表現を調べた。動詞に前接するもの[2]で，結果表現と見なせる表現が，「切る」では全 460 例（異なり語数 18 語），「塗る」では全 193 例（異なり語数 17 語）が見られた。表 1，2 に動詞に前接する頻度が多かった 10 語の頻度と上位 10 語中に占める割合を示す[3]。

表 1「切る」と共起する結果表現

順位	結果表現	頻度	上位 10 語中の割合
1	小さく，ちっこく	91	20.9
2	薄く，薄っぺらく	86	19.7
3	細かく	70	16.1
4	細く，細う	64	14.7
5	短く	55	12.6
6	大きく	22	5.0
7	細長く	18	4.1
8	丸く	12	2.8
9	深く	11	2.5
10	粗く	7	1.6
	合計	436	100.0

表 2　「切る」と共起する上位 10 語の結果表現の含意の有無による頻度と割合

	頻度	割合
「X した結果 Y になった」が成立 （小さく・ちっこく，細かく，細く・細う，短く，細長く）	298	68.3
「X した結果 Y になった」が成立しない （薄く・薄っぺらく，大きく，丸く，深く，粗く）	138	31.7
合計	436	100.0

表 3「塗る」と共起する結果表現

順位	結果表現	頻度	上位 10 語中の割合
1	薄く，うすーく	54	28.9
2	黒く	40	21.4
3	赤く	32	17.1
4	白く	29	15.5
5	厚く	14	7.5
6	青く	7	3.7
7	黄色く	4	2.1
8	濃く	3	1.6
9	ムラなく	2	1.1
10	美しく	2	1.1
		187	100.0

表 4　「塗る」と共起する上位 10 語の結果表現の含意の有無による頻度と割合

	頻度	割合
色彩語（黒く，赤く，白く，青く，黄色く）	112	59.9
非色彩語（薄く・うすーく，厚く，濃く，ムラなく，美しく）	75	40.1
合計	187	100

まず，「切る」では，上位 10 語までで 436 例あり（表 1），全 460 例のうち 94.8%を占める。表 2 では，切断を表す動詞「切る」と共起する上位 10 語の中で，「X した結果 Y になった」に適う語と適わない語の頻度と割合を示した。前者の 298 例（68.3%）に対し，後者は 138 例（31.7%）であり，明らかな偏りが見られる。さらに，上位 10 語内で，個々の語について対になる語に注目すると，「小さく，ちっこく」の 91 例に対して「大きく」は 22 例，「細かく」の 70 例に対して「粗く」は 7 例に留まっており，含意の有無により顕著な差が見られる。次に，「塗る」では，上位 10 語までで 187 例あり（表 3），全 193 例のうち 96.9%を占める。表 4 では，色の変化を表す動詞「塗る」と共起する上位 10 語の中で，色彩語と非色彩語の頻度と割合を示した。前者の 112 例（59.9%）に対し，後者は 138 例（40.1%）であり，両者の頻度には偏りが見られる。

限られた観察ではあるが，動詞に含意されているかどうかに基づく頻度には，含意・非含意で差が見られる。当然であるが，含意される結果状態ほど具現されやすく，含意されない結果状態は，含意される結果状態と比べて頻度が低いことから，頻繁に産出されるものではない。したがって，動詞に含意されない結果表現は，動詞の本来的な意味から生じるもので

はないため，非生産的である。

3.2 選択的な結果

轟（2004）で述べられているように，動詞に含意されない結果状態は，主語（動作主）が意図した状態である。轟（2004）のこの主張は，「??そばをくたくたにゆでる」と「そばグラタンの作り方 : まずはそばをくたくたにゆでます」（ともに p.250）の差から導かれる。「くたくたに」は，前者では一般的な経験にそぐわないのに対し，後者では意図のもと生じる結果であるためである。本研究も，結果状態が動作主の意図に基づくことを主張し，本節では，意図と結果表現がどういう関係にあるのか考察する。

（4） a． ファーストカットを斜めにするだけ！レモンをかわいく切る方法（ネット検索）
　　b． いちばんやさしいのは、ぐるりと丸く縫ってその中心をつまんで巻き上げたり、真っすぐ縫って縮める、またつまんだだけで糸でくくる、蜘蛛絞りや豆絞りがございました。（桑井いね『続・おばあさんの知恵袋』）

（5） a． オレンジシャーベットを丸く凍らす。
　　b.* オレンジシャーベットが丸く凍る。
　　c． 占い師がカードを 2 列に並べる。
　　d.* 風でカードが 2 列に並ぶ。

（4）の「かわいく」「丸く」は動詞に含意される結果表現ではない。そして，これらの結果表現は，動作主の意思の下，生じた結果状態といえる。また，（5ac）と（5bd）の対比からわかるように，無意志動詞文のとき，動詞に含意されない結果状態が自然に生じるとは考え難く，特殊な文脈でなければ成立しない。つまり，動詞に含意されない結果表現が起こるには，まず，動作主の意図的な動作が必要であり，そこからさらに，何らかの意図した結果が生じるよう動作がなされる。意図する結果は，（4）（5ac）の結果状態「かわいく」「丸く」「2 列に」から推測されるように，見た目をよくするためであったり，何らかを作る（行う）ために必要なものである。つまり，意図した状態の出現が動作主にとって重要であり，その状態を生じさせるために動作が行われると考えられる。このことより，動作自体より，動作の末に生じる状態が重要であり，結果への指向が強い。さらに，起こりうる結果状態は 1 つに絞られず（星形に凍らす，一口大に凍らす，など），動作主は多様な状態を生じさせることができる。通常の動作からは生じない結果表現は，動作主の何らかの目的のために，多数の選択肢の中から選ばれた選択的な結果状態である。以上より，動詞に含意されない結果表現は，動作主の結果への指向性が強い，選択的な結果状態でといえる。

3.3 客観性

動詞に含意されない結果表現は，動詞に含意される場合の結果表現と共通点を持っており，対象が働きかけを受け，何らかの性質を有したり，何らかの状態に置かれる。すなわち，

結果表現は，動詞の含意に関わらず客観性が高い状態である。

（6） a． 金属をまっすぐ伸ばす。

b． 針金をL字に曲げる。

（7） a． 肉を柔らかく焼く。

b． 荷台に机を横倒しに置く。

（6）は動詞に含まれる典型的な結果表現，（7）は動詞に含意されていない結果表現である。(6）も（7）も結果表現が名詞を修飾することができる（まっすぐな金属，L字の針金，柔らかい肉，横倒しの机)。また，(6)（7）ともに，動作主の働きかけを受け，対象が何らかの性質を有したり，何らかの状態に置かれる。新たに得た性質や状態は視覚や触覚で知覚可能な客観性の高い状態であるため，結果表現を表す語が連体形になり名詞を修飾することが可能になる（まっすぐな金属，柔らかい肉)。

一方で，結果状態とも様態とも解釈可能な場合がある。(8）の副詞的表現は結果状態に解釈できるだけでなく，動作の様態の解釈も不可能ではない。結果表現と認めやすい（7)「柔らかく」「さかさまに」と比べると，「ロマンティックに」「上品に」「いいかげんに」はやや主観性が高い語である。また，前者が五感で知覚可能であるのに対し，後者は感覚的で知覚が難しい。つまり，(7）の結果状態は，客観性が高く一般的に認識・知覚されやすい状態であるのに対し，(8）は発話者の主観性を帯び，経験や感覚により差が生じやすい。なお，後者は，「評価主体による評価付けという主観的レベル」（「評価レベル」，八亀 2003: 21）の表現ということができ，話し手（評価者）の主観性を帯びるため，動作の結果状態の解釈に限られず，動作の様態の解釈も可能になると考えられる。

（8） a． 小説をロマンティックに書いた。

b． 花を上品に生けた。

c． 壁をいいかげんに塗った。

結果状態と見なされるためには，客観性の高さも一要素であると考えられる。語によって主観性の程度が増す場合には，結果状態の解釈のみならず，動作様態の解釈も可能となる。以上より，動詞に含意されない結果表現には，話者間による認識の差異が少ない，客観性が高い状態に限られるという特徴が認められる。そして，このような客観性の高い状態であることは，「赤く塗る」「薄く伸ばす」といった動詞に含意される典型的な結果表現とも共通する。

4．結果状態を表す副詞的表現と共起する動詞

4.1 状態変化動詞・位置変化動詞

日本語では，典型的な結果構文に用いられる動詞は，状態変化動詞である。すでに見たように，動詞に含意されない結果表現も状態変化動詞と共起可能である。(9）の結果表現は本来的に動詞に含意されている結果状態である。一方で，（10）の結果表現は動詞に含意され

ているものとは考えづらい。

(9)　a.　海苔は日光でぱりぱりに干してこその値打ちなのに。(大本幸子『おたずね申す、日本一』)

　　b.　仁和寺の寛朝僧正のところで、同席した公卿達に陰陽道の技でカエルを殺してみせるようにせがまれ、術を用いて手を触れずにカエルを真平に潰した。（Yahoo!ブログ）

　　c.　鉄をドロドロに溶かす。

(10)　a.　スッパイマン梅干しを甘く干したもの。少しスッパイけど甘い。(Yahoo!ブログ)

　　b.　（熱湯不可の）ブレンダーを鍋に入れてもいいくらいの温度まで下がるし、刃に負担なく滑らかにつぶすのにちょうどいい水分量になります。（ネット検索）

　　c.　杏仁霜に1を少量加えて、なめらかに溶かす。(脇屋友詞『脇屋友詞のおもてなし家郷菜』)

また，(11) は位置変化動詞の例である。位置変化動詞は結果状態ではなく，[場所＋ニ]（机に，畑に，床に）を語彙化している。位置変化動詞は，状態変化動詞とは異なり，場所を表す句が語彙化されているが，この場所句は働きかけを受けた結果，対象が存在する場所である。状態変化動詞とは，状態・場所の語彙化の違いがあるものの，働きかけを受けて状態や位置が変化する点では，両者は共通している。よって，本研究では，状態変化動詞を広くとらえ，位置変化動詞を含むとする。

(11)　a.　机にカードを裏返しに置く。

　　b.　畑に苗を1列に植える。

　　c.　床に本を平らに積む。

4.2　作成動詞

作成を表す動詞にも結果表現が認められる。作成動詞には，本来的に何らかの結果状態が含意されていないが，(12) の下線部は，対象が作成され，その作成後の状態を表しているといえる。作成動詞は状態変化動詞とは異なり，対象が作られる，あるいは，出現することを表す動詞である。基本的には，作成動詞は，結果として作られた具体物が空間的に存在している。作成動詞と共起する結果表現は，行為の結果，作られた具体物に現れている状態ないし性質を述べている。

(12)　a.　やがて国産の銅戈は長く、幅広く作られるようになり、実用の武器から武器型祭器へと変化していく。(中村善則・森田稔『日本の国宝』)

　　b.　しょうがの風味のさっぱり味はちみつでちょっと 甘く仕上げるのが、おいしさの隠し技！（ケンタロウ『ケンタロウの野菜がうまいッ！』)

　　c.　そのばあいは、丸を大きく書くのがコツである。そして1の目を赤く書くことを忘れてはならない。(先崎学『小博打のススメ』)

4.3 活動動詞

本来的に対象の変化を含意せず，継続的な行為を表す活動動詞にも，対象の結果状態を表す表現が起こる例がある。（13）の動詞「ゆでる」「煮こむ」「炒める」は，状態・位置変化や作成を表す動詞ではなく，また，動詞は状態変化を含意しておらず，結果表現も含意されていない。しかし，「色よく」「くたくたに」「カリカリに」は，動作の結果対象に生じた状態を表していると解釈できる。そして，活動動詞と共起する結果表現は，多様な動詞と用いられず，多くは料理動詞であり,レシピや料理に関する文脈である。通常，「叩く」「さわる」などの多くの活動動詞には結果表現が起こることは難しい（*背中を赤く叩く，*銅像をつるつるにさわる）のに比べ，料理動詞では，（13）のようなものを問題なく容認できる。おそらく，料理に関する動詞の場合には，加熱などで対象に加わる力が大きく，結果として，対象に変化が生じる場合が多いためである。また，料理という文脈では，見た目をよくするため，おいしく食べるためなど，行為の結果を重視する。すなわち，料理に関する動詞は，対象に力が加わる行為で，かつ，行為の結果に対して明確な目的や意図を伴っているため，「叩く」「さわる」などの多くの活動動詞に比べ，結果表現が生起しやすいと考えられる。

（13） a. ブロッコリーは小房に分けて色よくゆでます。（上村泰子『成人病(生活習慣病)の献立 1600〜1700 キロカロリー』）

b. のぞくと赤い固形物、なんだったけ？溶かしてみるとトマト煮込み､､残り物のやさいをくたくたに煮こんだトマトソース昨日の夜、半額になったバケット、ジャガイモのスープ、サラダ、卵はオムレツをのっけて（Yahoo!ブログ）

c. 細切りしたハムやカリカリに炒めたベーコン、クルトン、パセリなどを飾って出来上がりです。（Yahoo!知恵袋）

5．記述的観察の考察

5.1 結果状態と状態変化動詞・作成動詞

変化や作成を表す動詞と動詞に含意されない結果表現は，動詞が持つ結果の含意が結果表現の成立に作用すると考えられる。状態変化動詞では，客観的な結果状態が本来的に含意されており（例　赤く塗る，粉々に壊す），作成動詞では，作成される具体物は，行為の結果，具体物として存在することが含意されている（例　字を書く，敷物を編む）。他方，動詞に含意されない結果表現にもおおよそ高い客観性が認められる。これより，動詞に含意される客観性が媒介となり，動詞の結果の含意が一時的に拡張していると考えられる。動詞の結果の含意の一時的な拡張により，「果物をかわいく切る」「団子を平べったく作る」といった結果への指向性の強い，選択的で客観的な状態が動詞の意味に組み込まれ，結果表現として成立する。さらに，動詞の結果の含意の拡張は一時的なものであるため，典型的な結果状態と比べて非生産的となる。

また，これまで，典型的な結果構文には「直接目的語の制限」があることが指摘されてきた（影山 1996，影山 2001，小野 2007，三原 2000 など）。この制限は，結果述語（動詞に含意される結果状態）は，働きかけを受ける目的語（＝対象，内項）について述べることを一般化したものである（Koizumi1994，中村 2003，影山 2001）。一方，動詞に含意されない結果表現を含む文に対して，対象と結果表現が述べる対象が厳密に一致しないことも指摘されてきた（井本 2016，影山 1996，松井・影山 2009，宮腰 2007）。（14）の結果状態は，ネギの 1 つ 1 つではなく，器の上のネギの総体が平らであること，ケーキ全体ではなく 1 切れが大きいことを述べている。このように，言語化された対象と結果状態が述べる対象の不一致のため，（14）や本研究で対象としてきた文を結果構文としない立場がある（影山 1996，松井・影山 2009，中村 2003）。

（14） a.　一郎がネギを器に平らに並べた。（宮腰 2007:106）

　　　b.　ケーキを大きく切った。（井本 2016: 18）

動詞に含意される典型的な結果表現と比べ，動詞に含意されない結果表現が動詞に組み込まれ，動詞の結果の含意が一時的に拡張することは，例外的な操作といえる。そのため，直接目的語の制限を典型的な結果表現と同程度に適用できないと考えられる。本研究では，動詞に含意されない結果表現が成立するとき，動詞の結果の含意の一時的な拡張が起こるため，直接目的語の制限も緩和されると考える。

5.2 活動動詞の結果状態とアスペクト限定

4.3 では，料理に関する動詞とも結果表現が起こることを述べた。前節で考察した状態変化動詞，作成動詞は動作の限界点があるのに対し，一般的に，活動動詞は限界点を持たないことから，非限界動詞に分類される。（15ab）に挙げた「泳ぐ」「押す」も活動動詞で，非限界動詞のため，継続期間を表す表現「～の間」を付けられる。（15cd）からわかるように，料理動詞も，限界点を持たない非限界動詞である。そのため，動作に要した時間を表す表現（～で）とは親和性が低い（?太郎は 20 分間で泳いだ，?カレーを 15 分で煮込んだ）。

（15） a.　太郎は（20 分ほどの間）泳いだ。（三原 2002:140）

　　　b.　次郎は（3 時間の間）故障車を押した。（三原 2002:140）

　　　c.　カレーを 15 分間煮込む。

　　　d.　野菜を 1 分間炒める。

活動動詞の場合には，対象となる名詞の持つ性質を利用して，結果表現が成立すると考えられる。例えば，「豆を甘く煮る」「玉ねぎをあめ色に炒める」では，豆が甘くなりうる性質を持つこと，玉ねぎがあめ色になりうる性質を持つことは，経験的な知識として認められる。「ブロッコリーを色よくゆでる」「野菜をくたくたに煮込む」でも同様である。つまり，対象に内在しうる客観的に認めることのできる性質が引き出されているといえ，引き出された性質は，動作主による結果への指向性が強い選択的な結果であるといえる。

他方，対象に内在しうる客観的な性質が引き出されることで，共起する時間表現が変化する。（16）のように，対象に内在する客観的な性質が引き出され，具現することで動作の継続時間ではなく，動作に要した時間を表す表現と親和性が逆転する。したがって，時間表現の差は結果表現の有無と連動していることがわかる。

（16） a.　豆を｛*10 分間／10 分で｝甘く煮る。

b.　玉ねぎを｛*3 分間／3 分で｝あめ色に炒める。

c.　ブロッコリーを｛*30 秒間／30 秒で｝色よくゆでる。

時間を表す表現の差より，（16）の結果表現は，非限界的な活動動詞に動作の限界点を示すアスペクト限定（三原 2002）の役割を担っていることがわかる。アスペクト限定は，継続的な動作が任意の限界点を持つことで，非限界動詞が限界動詞に変換されることである（三原 2002）。この時，アスペクト限定となる表現（アスペクト限定詞）は，動作の限界点を示す表現であり，「赤く塗る」「小さく切る」といった限界動詞の限界点（結果状態など）とほぼ同質と考えられる。また，料理に関わる活動動詞では，動作主が意図した状態が実現すると動作が完了する。つまり，対象から引き出された客観的で選択的な状態は，継続的な行為の限界点として機能することで，結果表現として成立する。活動動詞は，通常限界点を持たないため，アスペクト限定詞となる結果表現がつくことはあまり生産的には見られないと考えられる。

6．記述的分析の総括

以上の観察より，動詞に含意されない結果表現が成立するとき、結果表現は，客観性の高い状態で，動作主の結果への指向性が強い選択的な結果であるという特徴を有する。また、結果表現が，状態変化動詞や作成動詞と共起するとき，動詞が有する結果状態ないし作成された具体物の客観性や具体性が媒介となり，動詞の結果の含意が一時的に拡張する。これにより，動詞に含意されない副詞的表現が結果表現として機能する。さらに，料理に関わる活動動詞では，結果表現は対象に内在する客観的に認めうる性質が引き出されたものであることを述べた。結果表現は動作主の結果への指向が強い選択的な結果状態であり，アスペクト限定詞としても機能する。

7．概念構造への規定

本研究で対象としている結果表現は，本来的に動詞に含意されていない。そのため，本来的に動詞に含意されているものとは異なった構造となっていることが考えられる。上述の観察をもとに，以下，動詞に含意されない結果表現の概念構造における規定を試みる。

7.1　語彙概念構造のクローン操作

語彙概念構造（Lexical Conceptual Structure, LCS）とは，動詞を行為，変化，状態といった

意味的な観点から類型化し，それらを ACT，CAUSE，BE などの意味概念を用いて意味構造として表現したものである（影山 1996，影山・由本 1997)。一般的には，語彙概念構造によって代表的な動詞の意味は次のように表現される。なお，（17）の状態変化使役の LCS では意味概念 CONTROL で表示されているが，本研究では，使役を表す意味概念として CAUSE を用いて表記する。CONTROL と CAUSE は厳密には異なるものであるが，その際は以下の分析に影響するものではない。

（17）　静止状態・静止位置（状態動詞）

[$_{\text{STATE}}$ y BE [$_{\text{LOC}}$ AT z]]

位置変化・状態変化（到達動詞）

[$_{\text{EVENT}}$ BECOME [$_{\text{STATE}}$ y BE [$_{\text{LOC}}$ AT z]]]

継続活動（活動動詞）

[$_{\text{EVENT}}$ x ACT (ON y)]

状態変化使役（達成動詞）

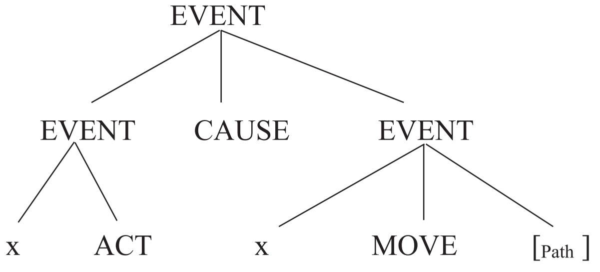
{ x / [$_{\text{EVENT}}$ x ACT (ON y)] } CONTROL [$_{\text{BECOME}}$ [y BE AT z]]

（影山 1996）

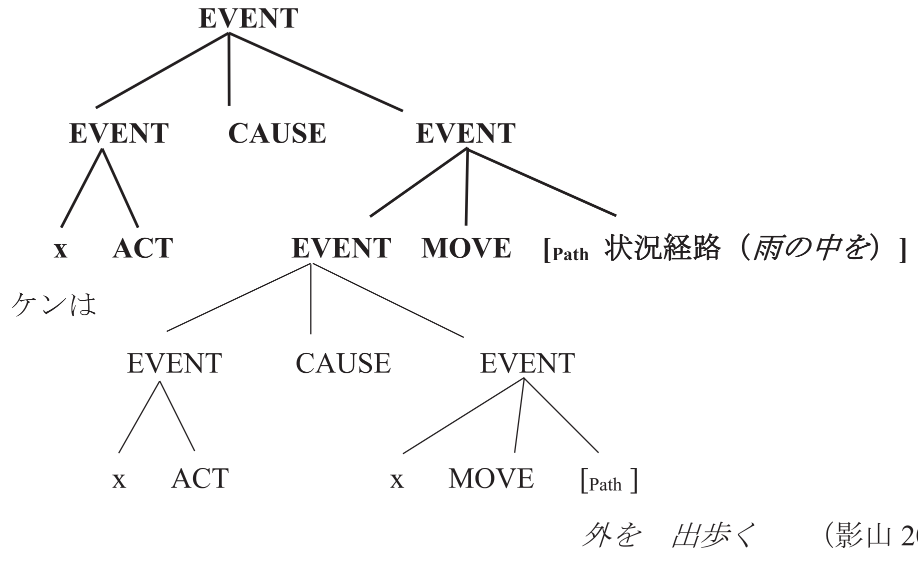
他方，（17）の概念構造で表現しきれない動詞文の一つに二重対格を許容する構文がある。日本語では一般的に一文中に 2 つの対格を用いることができないが（二重対格制約)，「彼は雨の中を外を出歩く」（影山 2002:40）では，2 つの対格（雨の中を，外を）が生起でき，正文をなす。影山（2002），Kageyama（2002）では，この構文の概念構造を説明するために，LCS の発展的操作である「概念構造のクローン形成」を考案した。クローン形成は（18）ように定義される。また，上述の 2 つの対格を含む構文では，移動動詞の LCS 全体（19a）がクローンされ，（19b）の構造となり物知的経路と抽象的な経路を表す 2 つの対格の生成位置が確保される。もとの LCS から派生した概念構造は，語の概念構造よりむしろ，文の概念構造である（影山 2002)。本研究でも，動詞に含意されない結果表現は，概念構造のクローン操作により意味構造上に生起する位置を確保できることを述べる。

（18）　概念構造のクローン形成：基礎となる語彙概念構造（の一部）をコピーして接ぎ木し，主述関係の整った新しい意味構造を作る。（影山 2002:38）

（19）a．物理的経路を含む語彙概念構造（ケンが外を出歩く）



b．クローン形成後の概念構造（ケンが雨の中を外を出歩く）



（影山 2002:41）

7.2 状態変化動詞・位置変化動詞

位置変化動詞と状態変化動詞の LCS は次のようになっている。（20）では動作主 x により，あるもの y のある場所 z への位置変化，また，（21）では動作主 x が対象 y に働きかけ，y の状態 z への変化を表している。位置変化動詞では，場所を表すニ句（花瓶を机に置く，コップを机に並べる）が語彙化されており，LCS 中の[y BE AT-z]が着点のニ句に対応する。また，状態変化動詞では，結果状態（皿を粉々に砕く，壁を赤く塗る）が語彙化されており，位置変化動詞と同じく LCS 中の[y BE AT-z]が結果状態を表す。つまり，位置変化動詞では，LCS 上に保証されているのは（22）の「焼き海苔に」「そばに」といった場所を表すニ句であり，「ひき肉」「絵」の状態を表す「平らに」「裏返しに」といった結果表現は本来的に LCS 上に生起する位置がない。同様に，（23）の状態変化動詞でも「赤く」のような色彩語や「小さく」といった大きさを表す表現が語彙化されており，「薄く」「かわいく」といった結果表現は動詞の意味に保証されていない。

（20） 位置変化動詞の語彙概念構造　[x CAUSE [y BECOME [y BE AT-z]]]

（21） 状態変化動詞の語彙概念構造[[x ACT ON-y] CAUSE [y BECOME[y BE AT-z]]]

（22） a． 1．焼き海苔（海苔巻に使う大きさの海苔）にひき肉を平らに乗せて、塩コショウする（Yahoo!知恵袋）

b． 偶然にもすぐそばにあの『曇り空』の絵が裏返しに立て掛けてあって、キャンパスの裏の倫子の字で書かれたタイトルが（恩田陸『不安な童話』）

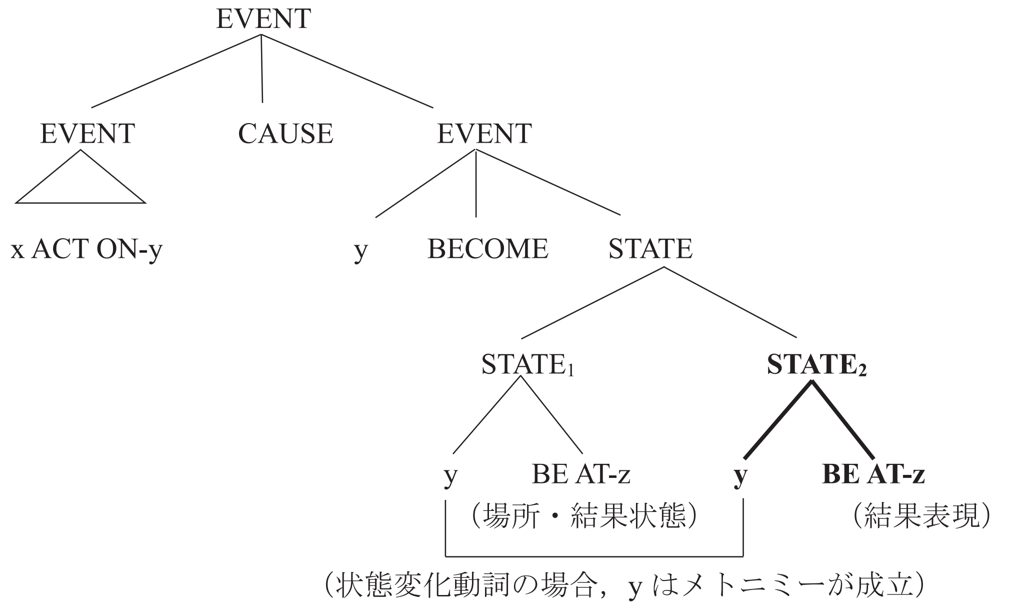
（23） a． （ニスを）一度に厚く塗るとむらになることがあります。（稲石嘉郎『自分でできる住まいの修理と演出』）

b． レモンをかわいく切る（（4a）再掲）

そこで，位置変化動詞，状態変化動詞の LCS に含まれる[y BE AT-z]にクローン操作を適用することで，動詞に含意されない結果表現の位置を概念構造上に確保する。クローン後の意味構造は（24）のようになり，$STATE_2$（太字部分）の[y BE AT-z]が本来的に動詞に含意されていない結果表現を保証する位置となる。動詞に含意される[y BE AT-z]をクローン操作により複製することで，一時的に結果表現の概念構造上の位置を確保できる。

さらに，状態変化動詞の場合，厳密にいえば，動詞に含意されない結果表現が述べるものは，文中に現れている要素ではなく，文中の要素とメトニミーが成立する要素である（井本 2009)。例えば，(23）では，「厚く」「かわいく」と厳密に対応するのは，言語化されている要素「ニス」「レモン」ではなく，「ニスの層」「レモンの外見」である。つまり，状態変化動詞の場合，結果表現は動詞が要求する要素（内項）ではなく，それとメトニミーをなす言語化されない要素の状態を述べている。クローン操作を適用することで，概念構造上に 2 つの[y BE AT-z]が存在し，クローン元の[y BE AT-z]とクローンされた[y BE AT-z]の y にはメトニミーの関係が成立する。表出した言語上では，言語化されるのは動詞が要求する要素であり，動詞に含意されない結果表現が述べる要素は表現されないものの，表出した要素より推論される。このように，結果表現は，言語化されずとも概念構造上において，動詞が要求する要素から派生した要素と厳密な対応関係が成立するといえる。

（24）　　状態変化動詞と位置変化動詞と共起する場合の結果表現の概念構造



7.3　作成動詞

4.2 で述べたように，作成を表す動詞とも，結果表現が共起する例が見られる。作成動詞の場合，結果状態は動作の結果作成されるもの（結果目的語，effectum object，影山 1996，影山・由本 1997）の性質や状態を述べている。(25）に，作成動詞の LCS を示す。(25）の

構造は，x（人か出来事）が引き起こし手となり y が現れる，という意味を表す。(26) に用例を挙げる。

(25) 作成動詞の概念構造　[x CAUSE [BECOME [y BE AT-z]]]

(26) a． 花子が絵を上手に描く。

b． デザイナーが広告を派手に作る。

c． 正式な茶席では、円座（竹などで丸く編んだ敷物）や煙草盆が置かれている（青木直美『現代』）((3c) 再掲)

作成動詞の場合，LCS のクローンを仮定しなくとも，[y BE AT-z]そのものが結果表現を保証する位置であると思える。しかし，以下，本研究では，作成動詞に含まれる[y BE AT-z]は，本来的には，空間的場所を保証する位置で，結果表現は空間的場所を表す[y BE AT-z]のクローンにより概念構造上の生起位置を確保することを述べる。

作成動詞に結果表現が認められるとき，結果表現が述べているのは，完成された結果目的語である。(27) の例では，「上手に，派手に，つつましく」は，「7 割，3 分の 2 ほど，半分」といった未完成の結果目的語の状態を表すとは解釈しづらい。また，複数からなる完成したものの全体に対して，その一部に対する状態を述べていると解釈することもできる。つまり，この解釈は，「10 枚描いた絵の 7 枚（が上手），30 枚作った広告の 20 枚（が派手），4 つ編んだ円座の 2 枚（が丸い）」といったように，出来上がった複数からなる結果目的語の一部に対する結果状態を述べていると考えられる。

(27) a．#/? 花子は 7 割絵を上手に描いた。

b．#/? デザイナーは 3 分の 2 ほど広告を派手に作った。

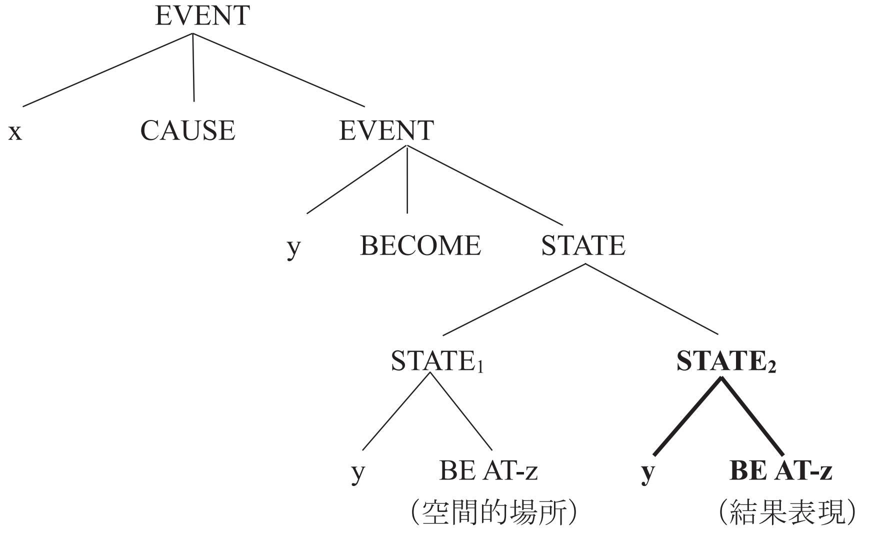
c．#/? 半分円座を丸く編む。

以上より，作成動詞と共起する結果表現は，結果目的語がすでに完全な状態で存在していることが条件であることが分かる。このことは，ある状態を述べるには，対象が存在していないことには述べようがないと言え，言い換えると，ある状態を述べるときには，その対象が存在している必要があるといえる。例えば，「字をきれいに書いた」というとき，字を書いていないのに（完成していないのに）「字をきれいに書いた」は成立しない。すなわち，「字をきれいに書いた」は，字が存在して初めて成立する文である。また，発話時に対象が存在していない場合でも（「字をきれいに書きましょう」），字の存在を前提としたうえでの発話と考えることができ，この発話は，字が書き上がった時点を指向しているといえる。さらに，具体物である結果目的語が存在することは，同時に，空間的な場所の存在を含意する。このことから，(25) で挙げた作成動詞の LCS における[y BE AT-z]は，本来的には，対象 y（結果目的語）の存在を保証する位置であると考えることができる。(26) で見た例も，「ノートに絵を上手に書いた」「板に広告を作った」「東京に家を建てた」などのように，ある場所（ノート，板，東京）に存在していることを認めることができる。(26d) では，特定の場所を明示することはできないが [4]（「??居間に敷物を丸く編んだ」），「敷物」が空間的に存在

することは確実である。このように，必ずしも言語化されるとは限らないが，客観的に存在しないでは，何らかの状態を述べることはでない。よって，作成動詞の LCS における[y BE AT-z]について，言語化の有無に関わらず，空間的存在場所を保証する位置であるといえる。

したがって，作成動詞の LCS 中の[y BE AT-z]が，本来的に空間的存在場所を表すのであれば，異なる意味内容である結果表現は，空間的存在場所を保証する[y BE AT-z]をクローン操作することで，結果表現の位置が確保される。すなわち，作成動詞中の空間的存在場所を表す[y BE AT-z]（$STATE_1$）に対し，クローン操作が行われる結果，概念構造上に結果表現を保証する[y BE AT-z]（$STATE_2$）が生成される。クローン操作の結果の概念構造の全体は，（28）のようになる。

（28） 作成動詞と共起する場合の結果表現の概念構造



7.4 活動動詞

本研究では，4.3 において，活動動詞とも結果表現が共起すること，また，(30)（(13) 再掲）のように，料理に関する文脈で見られることを指摘した。活動動詞は動作主の意図的な行為や対象 y への働きかけを表す。(29) のように，活動動詞の LCS は意志的な自動詞である[x ACT]と継続的な動作を表す他動詞[x ACT ON y]の 2 通りが考えられ，以下，後者が本研究の対象となる。しかし，活動動詞の LCS には，[y BE AT-z]が含まれておらず，クローン操作のしようがない。一方で，5.2 では，活動動詞であっても結果表現がアスペクト限定詞となり，非限界的な動詞から限界的な動詞に変換されていることを述べた。したがって，活動動詞には，クローン操作は行えないものの，一時的に，LCS が変化していることが考えられる。さらに，活動動詞と共起する結果表現は料理動詞に限られることは，料理という行為自体が対象に加わる力が大きいこと，見た目やおいしく食べるためといった目的や意図を伴い，結果への指向が強い行為であることより，活動動詞の LCS に変化とその結果を表す概念構造[y BECOME [y BE AT-z]]が組み合わされている（合成，影山 1996，影山 2002）と

考えられる。

（29）活動動詞の概念構造　[x ACT]　または[x ACT ON y]

（30）a．ブロッコリーは小房に分けて色よくゆでます。（上村泰子『成人病(生活習慣病)の献立 1600～1700 キロカロリー』）

b．のぞくと赤い固形物、なんだったけ？溶かしてみるとトマト煮込み、、残り物のやさいをくたくたに煮こんだトマトソース昨日の夜、半額になったバケット、ジャガイモのスープ、サラダ、卵はオムレツをのっけて（Yahoo!ブログ）

c．細切りしたハムやカリカリに炒めたベーコン、クルトン、パセリなどを飾って出来上がりです。（Yahoo!知恵袋）

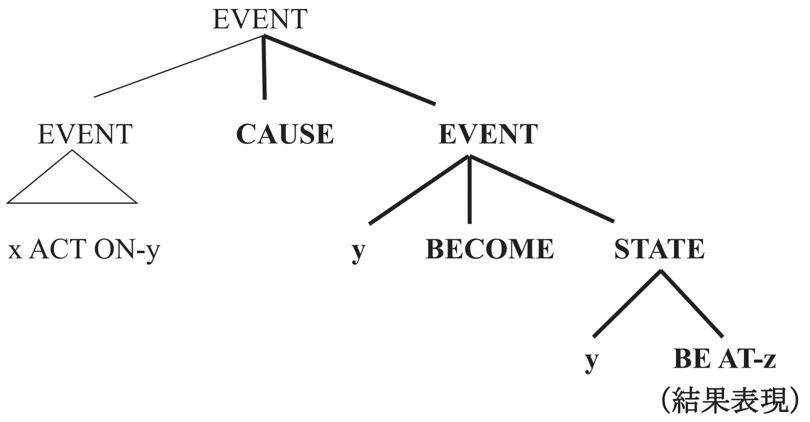
影山（1996，2002）では，概念構造の合成は，英語のように行為動詞に前置詞句を付け，生産的に有界的な文章を産出できる言語に成立することが述べられている。（31）では，継続的な動詞である drink，float に dry，to a small island が加わることで，「空っぽに，小島に」といった有界的な文となる。

（31）a．He drank the bottle dry.

b．The raft floated to a small island.　（影山 2002: 31）

概念構造の合成は日本語では生産的に起こるものではないものの（影山 2002），本研究では，日本語では，上述のような料理という活動の性質より，例外的に料理に関する動詞においては概念構造の合成が起こると考える。そして，料理に関する動詞と結果表現が共起するとき，（32）のような概念構造を提示する。（32）では，動作主が対象に働きかけ続け（[x ACT ON-y]），それにより，対象に何らかの変化が起きることを表しており，CAUSE [y BECOME [y BE AT-z]]（太字部分）が合成された部分である。そして，合成された部分の[y BE AT-z]が結果表現の生起を保証する位置となる。なお，日本語では，英語のように，概念構造の合成は広く認めらないものの，料理動詞や料理の文脈においては認められることには，語用論的な要因も関わっていることも推測される。

（32）料理動詞と結果表現の概念構造　[x ACT ON y] **CAUSE [y BECOME [y BE AT-z]]**



８．記述的分析と概念構造の関係

3 節では動詞に含意されない結果表現が有する特徴を述べ，4 節では結果表現が共起する動詞について記述し，結果表現の成立について述べた。本節では，これらの二節と 7 節で示した概念構造のクローン操作および合成操作との関連を述べる。

状態変化動詞・位置変化動詞では，動詞の意味の中に結果状態や位置表現が内在している。また，作成動詞では，状態変化動詞・位置変化動詞ほどではないものの，動作の結果，ある空間に結果目的語が具体物として存在することより，結果が含意されているといえる。状態変化動詞・位置変化動詞・作成動詞では，動詞に内在する結果の含意が一時的に拡張し，動詞に含意されない結果表現が成立することを述べた。この拡張の操作そのものは，概念構造上では 7.2 で述べたクローン操作と対応する。クローン操作では，クローンされるのは LCS に含まれる[y BE AT-z]であることより，クローンが起こった概念構造においても，目的語で現れる対象（内項）以外の要素を述べることはなく，直接目的語の制限には違反しない。しかし，クローン操作は，動詞に含意されない表現の位置を LCS 上に確保するための操作であるため，典型的な結果表現と比べ，非典型性が高いことと相関して，直接目的語の制限が緩和される。制限の緩和の結果，言語化される対象と結果表現が述べる対象にメトニミーが成立する範囲内でのみ，若干の不一致が生じる。クローン操作と結果表現の対象にメトニミーが成立することは，相互に支持しあっているといえる。

活動動詞と共起する結果表現については，料理動詞に限られることを述べた。そして，活動動詞には[y BE AT-z]が含まれておらずクローン操作ができない代わりに，[x ACT ON-y]に CAUSE [y BECOME [y BE AT-z]]が合成されていることを述べた。ここにおいても，料理動詞と共起する結果表現がアスペクト限定詞として機能し，非限界動詞から限界動詞に変換していることを考慮すると，CAUSE [y BECOME [y BE AT-z]]の合成操作と結果表現のアスペクト限定詞としての機能は相互に支持しあうものである。LCS の合成は，日本語では生産的ではないが（影山 2002），明確な意図や目的のために何らかの状態になるまで継続して動作が行われることは，結果への指向が強いといえる。そして，料理という行為の性質上，動作主が何らかの意図や目的が実現するまで継続可能な動作であること，対象に加わる力が大きいことにより，料理動詞に結果表現が多く見られるといえる。

９．結論

本研究では，動詞に含意されない表現が結果表現として成立することを指摘し，それらの記述的分析を行った。そして，概念構造上で，結果表現の生起位置の規定を行った。結果表現の特徴として，動詞に含意されるものと比べ，頻度の面で大きな差があり非生産的であること，動作主の目的や意図に基づいた，結果を指向する選択的な結果であること，客観性の高い状態であることを指摘した。これらの特徴は，状態変化動詞・位置変化動詞・作成動詞においては，動詞に含まれる結果の含意が拡張し，動詞に含意されない状態が結果表現とし

て解釈される。また，料理動詞に限っては，対象に内在する客観的な性質が引き出され，それがアスペクト限定詞として動作の限界点となることで，結果状態の解釈が成立する。

概念構造においては，状態変化動詞・位置変化動詞・作成動詞に関しては，LCS 中の[y BE AT-z]がクローン操作されることで，結果表現の位置が確保される。そして，クローン操作によって，直接目的語の制限が緩和される。言語化される対象と結果表現が述べる対象が厳密に一致しない場合があるものの，メトニミーが成立する範囲内で推論により適切に関連付けられ，概念構造上で厳密な対応関係が成立することを述べた。継続的な動作である料理動詞では，クローン操作は適用できないが，料理動詞の LCS に CAUSE [y BECOME [y BE AT-z]]が合成されているとした。合成操作の妥当性は，結果表現がアスペクト限定詞として機能することより裏付けられる。

本研究で対象とした表現は，結果構文における結果表現と見なすかどうか立場が分かれるものである。従来指摘されてきた典型的な結果構文と比べると，本研究で対象とした結果表現は，生産性，意味的特徴，概念構造において，非典型性が認められる。本研究では，動詞に含意されない結果表現も日本語結果構文の一部といえると考えるものの，日本語結果構文の枠組みにおいては，上述の 3 つの側面では非典型的な性質を有する結果構文として位置づけられる。

註

1　本発表の用例は，「現代日本語書き言葉均衡コーパス」やネット検索，作例に基づく。

2　結果状態を表す副詞的表現は，多くが動詞の前に置かれる（難波・玉岡 2016）。

3　表 1，3 は結果状態解釈ができる形容詞連用形が動詞に前節する場合に限定している。「X に」（一口大に切る，緑色に塗る）を含めると，「切る」で計 2697 例（異なり数 191 語），「塗る」で計 347 例（異なり語数 92 語）であった。

4　「編む」の場合は「セーターを編む」のように結果目的語だけでなく，「髪を編む」といったように対象が結果目的語ではない場合も認められる。おそらく，「編む」が場所表現を容認しがたいのは，必ずしも結果目的語を取らないという個別の性質が関わっているのではないかと思われる。

参考文献

井本亮（2001）「位置変化動詞の意味について—副詞句の解釈との対応関係と語彙概念構造—」『日本語文法』1 巻 1 号，pp.177-197.

井本亮（2009）「第 7 章　日本語結果構文における限定と強制」小野尚之（編）『結果構文のタイポロジー』ひつじ書房，pp267-313

井本亮（2016）「『ケーキを大きく切った』をめぐって——一体性変化の修飾——」『商学論集』第 84 号第 3 巻，pp.17-35.

小野尚之（2007）「第 1 章序論—結果構文をめぐる問題—」小野尚之（編）『結果構文研究の新視点』ひつじ書房，pp.1-31.

影山太郎（1996）『動詞意味論—言語と認知の接点』くろしお出版.

影山太郎（2001）「第 6 章結果構文」影山太郎（編）『日英対照動詞の意味と構文』大修館書店，pp.154-181.

Kageyama, Taro（2002）. Conceptual cloning. *Japanese/Korean linguistics* 11, pp.20-33.

影山太郎（2002）「語彙概念構造の拡充パターンと有界性」『日本語文法』2 巻 2 号，pp.29-45.

影山太郎（2009）「第 3 章語彙情報と結果述語のタイポロジー」小野尚之編（2009）『結果構文のタイポロジー』ひつじ書房，pp. 101-139.

影山太郎・由本陽子（1997）『語形成と概念構造』研究社.

Koizumi, Masatoshi（1994）Secondary Predicates. *Journal of East Asian Linguistics* 3, pp.25-79.

轟里香（2004）「英語における結果構文—Iconicity の観点から」『北陸大学紀要』第 28 号，pp.247-255.

中村捷（2003）『意味論—動的意味論—』開拓社.

難波えみ・玉岡賀津雄（2016）「コーパス検索による様態と結果の副詞の基本語順の検討」『言語研究』150, pp. 173-181.

松井夏津紀・影山太郎（2009）「第 8 章副詞と二次述語」影山太郎（編）『日英対照形容詞・副詞の意味と構文』大修館書店，pp.260-292.

三原健一（2000）「結果構文〈総括と展望〉」大阪外国語大学日本語講座『日本語・日本文化研究』第 10 号，pp.9-35.

三原健一（2002）「動詞類型とアスペクト限定」『日本語文法』2 巻 1 号，pp.132-152.

八亀裕美（2003）「形容詞の評価的意味と形容詞分類」大阪大学大学院文学研究科日本語学講座『阪大日本語研究』15，pp.13-40.

Washio, Ryuichi（1997）Resultatives, Compositionality and Language Variation. *Journal of East Asian Linguistics* 6, pp.1–49.